

山の夜

嵯峨天皇

居も移して今夜薜蘿に眠る

夢裏の山雞曉天を報ず

覚えず雲来つて衣暗に湿う

即ち知る家は深溪の辺に近

【作者】嵯峨天皇(七八六〜八四二年)第五十二代の天皇。平安朝初期の漢詩人で書家。御名(ぎよめい)は神野(かみの)、第五十代桓武(かむむ)天皇の第二皇子として降誕された。幼時より聡明で読書を好み、博く経史に通じ、詩文に長せられ、諸芸にも精(くわ)しく、僧空海、橘逸

勢(たちばなのはやなり)とともに三筆と称された。また仏道にも帰依(きえ)せられ東寺を空海に賜(たま)いて真言宗の根本道場とさせた。文化の興隆に努められると共に諸式、諸官をも設けた。これによって平安朝の制度文物(法律、学問、芸術、宗教)は備わった。御歳(おんとし)二十四歳で即位され御在位十四年、皇位を淳和(じゆんな)天皇に譲られ、承和(じやうわ)九年七月十五日、五十七歳で嵯峨院(今の大覚寺)で崩御された。御陵は嵯峨山上陵(さがのやまのえみささぎ 京都市右京区)。

【語釈】*薜蘿:まさきのかずらとつたかずら。 *夢裏:ゆめのなか。 *山雞:やまどり。 *曉天:夜明けの空。 明け方。

*暗 濕:いつのまにかしめる。 *深 溪:ふかいたにま。

【通釈】今夜は久方ぶりに御所を出て、かずらが垂れ下がっている木深いところで、ぐっすり眠ったのである。夢もまださめず、うとうとしていると、き山鳥がしきりに鳴き夜明けをつげた。雲(くも)も(や)が山居をつつんでいて知らぬまに衣服がしめついていた。そこで、なるほどこの家は深い谷川の近くにあるのだと、わかったのである。